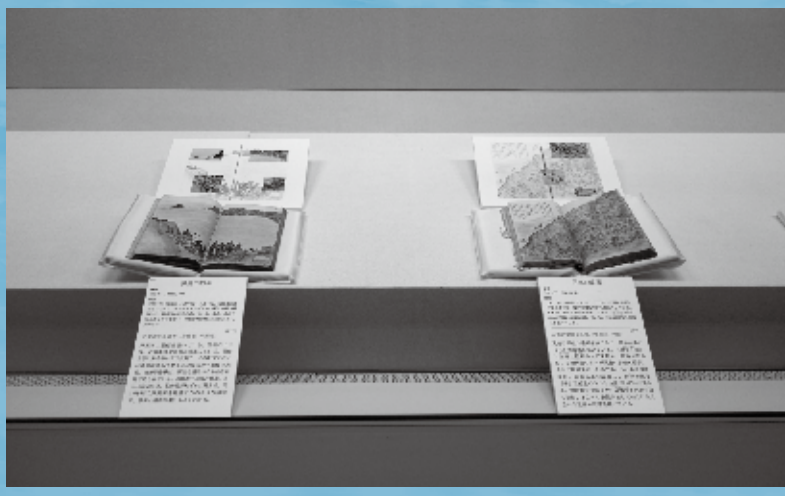
秋田県立博物館【菅江真澄資料センター】

真澄

MASUMI

No.38



企画展　重要文化財「菅江真澄遊覧記」の公開

左上：解説パネルの見方を説明、信濃の日記展示
右上：男鹿の日記展示（詳細を補助パネルで説明）
左下：「菅江真澄遊覧記」を知る18 の視点、軸装「避疫霊」
右下：印刷物３種と展示チラシの配布

「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介する広報紙です。

第81回企画コーナー展

令和2年　3月14日(土)～5月17日(日)

かつて八郎潟は、琵琶湖に続き、日本第二位の広さを誇り、日本海ともつながる汽水湖でした。果てしなく広がる湖面、そして湖岸に連なる美しい山々の情景は、県内でも有数の景勝地として知られ、また「水一升に魚七合」といわれるほど多くの魚が捕れた豊かな湖でした。当然、周辺に暮らす人々の生活の中心には八郎潟がありました。

真澄は八郎潟周辺を幾度となく歩き、その地に根付く文化、習俗、信仰、そして人々の暮らしぶりを記録しています。本展示では真澄の視点を通して、真澄が訪れた当時の八郎潟周辺の様子や、そこに暮らす人々の姿について紹介しました。

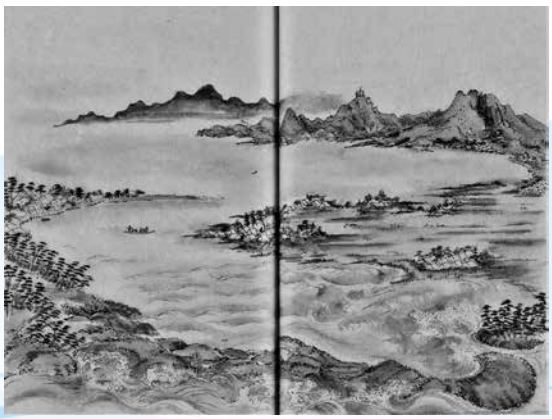
1 真澄、八郎潟の名称を想う

日記『男鹿の秋風』本文より意訳

「確かなことではないが、この湖をかつて琴の湖といったという。近江の湖の形が、琵琶の形をしていることになぞらえて、この湖は琴と呼ばれたのだろうか」

真澄は、八郎潟が古くは琴の湖という名で呼ばれていたことを記録しています。真澄はこの呼称に関して、「八郎潟の形が琴に似ているから、というよりは、古くから八郎潟が琵琶湖と並ぶ大きさの湖であることが知られていて、「琵琶」に対しての「琴」、という見立てだったのではないか」、と考察しています。ただ、真澄は随筆『筆のまにまに』に、「水の姿もやや琴のさませり＝湖の形もやや琴の形のようである」と記しています。実際の八郎潟の形を知っている現在の私たちからすれば、少々疑問を抱く内容ですが、真澄は自身の目で見て、足で歩いて、八郎潟が南北に長く、東西に短いということを知り、その特徴をもって、「琴のさませり」と記したのかもしれません。

そもそも八郎潟の「八郎」とは、潟を作ったとされる龍神、八郎太郎の名によります。南祖坊によって十和田湖を追われ、天瀬川（三種町）にたどり着いた八郎太郎は、そこで大洪水を起こして潟を作り、安住の地として住み着きます。真澄もその伝説については聞き及んでいて、日記にも記しています。



日本海とつながる八郎潟
『男鹿の秋風』　館蔵写本

しかし、真澄は八郎潟に住む龍は八郎太郎ではなく、別のものであると考えていた節があります。それは、八岐大蛇です。真澄は八郎潟のことを、「八龍湖」、または「やおろちのうみ」などと呼びました。

日記『男鹿の秋風』本文より意訳

「この中秋の名月を八龍の湖（この国の人は八郎潟、ともっぱら呼んでいる。やまたのおろちを祀って八龍の神ととなえ、それをなまって浦の名としたものであろうか）に行って眺めたいと思い、久保田を出立した」

日記『氷魚の村君』本文より意訳

「去年から揚泓呂地乃汙瀰（これは八龍湖のことをいう）や三倉鼻、森山などにたいそう近い谷地中（五城目町）という集落の佐藤某家で過ごし、正月を迎えた」

真澄は土地の者が呼んでいる「八郎」潟の名称は知っていたようですが、それをヤマタノオロチ、つまり「八龍」の訛りであると考えました。なぜそこまで八郎潟とヤマタノオロチを関連付けようとしたのでしょうか。その答えは、八郎潟周辺に祀られている神々にあると考えられます。

潟上市天王にある東湖八坂神社は、祭神を素戔嗚尊とする神社です。スサノオノミコトは古事記にてヤマタノオロチ退治をした神として知られ、当社では牛乗りや蜘蛛舞など、ヤマタノオロチ退治にまつわる祭礼が行われています。真澄も一連の祭礼について、日記に記しています。

また八郎潟町三倉鼻の夫殿権現と三種町芦崎の姥御前神社もヤマタノオロチと関係があります。夫殿権現には男神・足名槌、姥御前神社には女神・手名槌がそれぞれ祀られています。この二柱の神は夫婦で、古事記ではこの夫婦神の娘の奇稲田姫が、ヤマタノオロチの犠牲になるところをスサノオノミコトによって助けられるという話になっています。

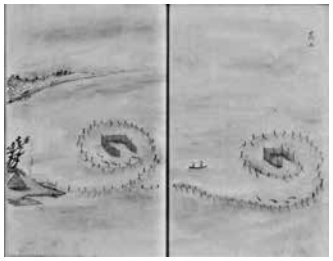
真澄は八郎太郎の伝説を知りながらも、周辺の神社に祀られている神々や執り行われている祭礼との関連から、この湖に住む龍神をヤマタノオロチとしたのでしょう。中央の神々の話が、遠く離れた秋田の地まで伝わり、人々の生活にとけ込み、神社が設けられ、神事が行われている。真澄はその事実に驚き、感じ入るものがあったからこそ、土地の者が呼ぶ八郎潟ではなく、あえて「八龍湖」の名称を用いたのではないでしょうか。

2 真澄、人々の生業を知る

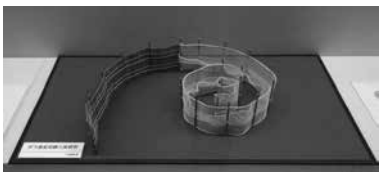
汽水湖であった八郎潟では日本海から入ってくる海水魚と、潟に生息する淡水魚の両方がよく捕れ、「魚の宝庫」として古くから漁業が盛んに行われていました。真澄も様々な漁について記録しています。

◆張切（はっきり）網漁（男鹿市・船越水道）

日記『男鹿の寒風』に、三枚続きで描かれた図絵があります。一番初めの図絵に「其一、船越八龍の浦、鰡魚張切り網の図」という説明が書かれています。鰡魚とはボラのことです。『旺文社古語辞典』によると、「ボラは【なよし】とも言い、【名吉】と書く。出世魚であるボラは成長するにつれて名が変わり、めでたいとして【なよし】という」とあります。三枚の図絵は、驚くと跳びはねるボラの習性を利用した張切網漁という定置網漁の様子を描いたものです。



船越水道のボラ漁　其一
『男鹿の寒風』館蔵写本

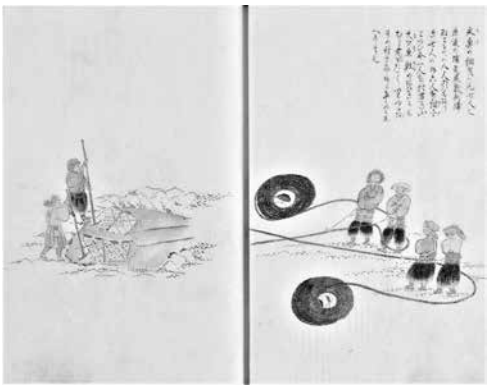


ボラ漁網模型
八郎潟町蔵

◆氷下引き網（曳網）漁（八郎潟周辺）

真澄は冬季の結氷した八郎潟で行われた氷下引き網漁について、日記『氷魚の村君（むらぎみ）』に、図絵とともに記録しています。これは、厚く張った湖面の氷に「手力（テヂカラ）」という道具で大小いくつもの穴をあけ、その穴から網を通して複数名で引き上げる漁法です。

真澄の説明には「網曳は大体七人で作業し、集落によっては八人の場合もあった。その中の一人を村君といい、いわゆる漁師の長の意で、古くからの習いだろう」とあります。氷下引き網漁ではワカサギやフナ、ボラなどが捕れました。漁の様子が分かる図絵には、網を効率よく引けるよう、腰に「曳子板（ヒコイタ）」と呼ばれる板を当てて網引きしている様子が描かれています。作業に当たる人々は、毛笠、毛帽子といった葦や海藻などで編まれた防寒具を身に着けてはいましたが、寒風山からの寒風おろしが吹きつける氷上での作業は、大変な重労働であったことが想像できます。



網を引く様
『氷魚の村君』館蔵写本

3 真澄、板碑を見る

亡くなった人の冥福を祈る目的や、自身の死後の安寧を願う目的で作られた「板碑」というものがあります。八郎潟周辺には板碑が多く見られ、真澄も記録しています。

◆実相院の板碑（井川町・今戸）

日記『ひなの遊び』本文より意訳

「今戸の村に着いた。熊野山密厳寺実相院という寺の後方から、前の小橋のたもとまで、八つの石の卒塔婆が立っていた。みな康永・暦応の紀年銘を記し、梵字が刻まれている」

紀年銘は南北朝時代（一三三六～一三九二）のもので、特に暦応・康永は北朝の年号です。真澄自身もこれらの板碑がその時代に作られたものであることを認識していました。

現在も実相院は当地にあり、井川町文化財として、板碑も現存しています。真澄の図絵には四つの板碑が描かれています。そのうち、一番右端、康永三年と彫られた碑は、現在の実相院入り口近く、正面向かって右側に置かれているものだと思われます。紀年銘が同じで、形も図絵とよく似ています

実相院の板碑四基
『ひなの遊び』館蔵写本

◆石仏庵の板碑（八郎潟町・小池）

日記『ひなの遊び』図絵説明文より意訳

「大川の北東に小池村があり、その近くに石碑が多くある。開仏庵と言っていたが、そう遠くない昔に、田んぼで作業をしていると百余りの石碑が出てきた。延元、暦応、康永などと刻まれている。そうして、今は石仏庵の名で呼ばれる」

八郎潟町小池にある板碑群を真澄は図絵に記録しています。真澄が記録した板碑は、現在、五十六基がその存在を確認できます。当地では平成三十年に屋根のある保護施設を設け、板碑はその中に置かれ、風雨による摩滅や劣化から守られています。

小池の板碑群
『ひなの遊び』館蔵写本

実相院の板碑実物（康永三年銘）
令和２年撮影

第82回企画コーナー展

真澄 酒物語

―真澄と酒を巡る話―

令和2年7月18日(土)～9月6日(日)

各地を歩き、人々の生活をつぶさに観察した真澄の記録の中には、酒にまつわるものがいくつか含まれています。酒は人類の歴史上、古くから存在が確認され、時に自然を司る神々への捧げ物として、時に円滑なコミュニケーションを図るための媒体として、その価値を見い出されてきました。当然、人と酒の関係は深く、生活の中のあらゆる場面において、酒はいつも人のすぐそばにありました。

本展では、江戸時代後期における人々と酒の関わり方や、土地土地に残された酒にまつわるエピソードなどを、真澄の視点を通して紹介しました。真澄が記録した酒にまつわる様々な「物語」を楽しんで頂ければ幸いです。

❶酒を供える

◆秋田の地に残る古(いにしえ)さまの神事

真澄は、日記『みかべのよろい』に、北秋田市森吉様田で見た「穎祭(かいほかい)」の様子を書いています。人々は早稲(わせ)の収穫祝いとして、酒と一緒に稲穂の先（穎(かい)）を、五穀豊穣を司る年(とし)の神(かみ)に供えていました。

また日記『男鹿の寒風』には、男鹿市男鹿中滝(おがなかたき)川で見た「穂酒(ほざけ)」について、図絵とともに記録しています。「穎祭」によく似た神事で、新米を刈り取った日に、酒を片口に入れ、その中に稲穂一房を浸して神に供えました。

真澄は、これらの神事を「古くからの習わしである」としました。その根拠は『男鹿の寒風』の「穂酒」図絵説明文中に、真澄が引用した文章にあります。それは平安時代の法令集『延喜式(えんぎしき)』第八巻の「祈年祭祝詞(きねんさいのりと)」の一部です。内容を意訳すると「稲の神様のおかげで豊作になれば、初めて取れた稲穂を供え、酒にも醸して捧げます」となります。

秋田の地には、平安時代の祝詞そのままに、収穫祝いとして、酒と稲穂を神に供える古(いにしえ)ざまの神事が残されている、と真澄は言いたかったのでしょう。

穂酒実物再現資料　館蔵

❷酒を楽しむ

◆地元の人に愛された祝い歌

天明六年（一七八六）、かつては仙台藩領であった、現在の岩手県奥州市胆沢(いさわ)の村上家で真澄は正月を迎えました。集まった人々は、大いに飲んで歌って、新年を迎えた喜びを表していました。

日記『かすむ駒形』本文より意訳

向こうの部屋では人々が大勢居並んで、濁り酒を酌み交わし「秋には豊作になるだろう」などと語り合い、「大いに飲もう」と勧めている。すると、「もうお許しを」、「いいや、お飲みなさい。何かしら楽しいことがあったとしても、この一杯の濁り酒に勝るものがあろうか」と、微笑み喜び、「飲めや大黒、歌えやゑびす、出でて酌とれ稲倉魂(いなくらだま)」などとくり返し歌った。

穂酒の図
『男鹿の寒風』館蔵写本

一同が歌っていた歌を、真澄は『ひなの一ふし』（諸国の民謡を集めたもの）でも詳しく書いています。胆沢周辺の祝言歌であるとして、

「さんさ時雨と萱野の雨は
音もせで来て降りかかる
飲めや大黒　うたえやゑびす
出でて酌とれ　稲倉魂(いなくらだま)」

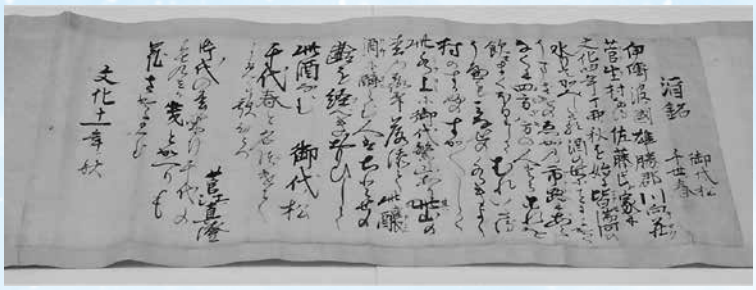
と紹介しています。真澄が記録したこの歌詞には、現在も歌われている宮城県民謡「さんさ時雨」の歌詞と共通する箇所があります。当地では祝いごとの歌として、酒とともに人々に長い間親しまれてきた歌なのでしょう。

七福神の大黒、恵比寿とともに歌詞に出てくる「稲倉魂(いなくらだま)」とは、穀物の神である「宇迦之御魂神(うかのみたまのかみ)」をさしますが、この神は七福神の弁天と同一視されることもあります。

❸酒の名は

◆真澄が名付けた酒

文化十一年（一八一四）地誌作成調査のため、真澄は湯沢市皆瀬川向(かわむかい)に赴き、肝煎、佐藤太治兵衛家の世話になりました。その縁から、佐藤家で醸造した酒の名を付けるように頼まれた真澄は、土地の清麗さや酒を飲んだ人々の長寿を祈念して「御代ノ松」と「千世ノ春」という二つの名を酒に付けることを書に認(したた)めて、佐藤家当主に送りました。「酒銘」と題された真澄自筆の書が現在も残っています。



『酒銘』　館蔵

「酒銘」より意訳

酒銘　御代ノ松
千世ノ春

出羽国の雄勝郡川向荘菅生村の佐藤家において、文化四年秋に初めて、皆瀬川の水を用いて造った酒は、世間の評判がよく、日本書紀に記された「旨酒の餌香の市」には売っていなかっただろうが、多くの人がこの酒を飲みたいと集まってくる。本当に皆瀬川の水は清く、菅生村は清々しいところにある。皆瀬川の上流には、緑豊かに生い茂る山があり、その山の松から零れ落ちた雫で酒を醸し、その酒に酔いしれた人々は千年の年月を生き永らえる心地がするだろう。このことをもってこの酒を

御代ノ松　千代ノ春

と名付ける

県南部で収集された酒樽に「御代ノ松」の焼印が押されたものがあります。真澄が名付けた酒が実際に世に出回っていたことを物語る貴重な資料です。

『酒樽』　個人蔵（横手市）

4 酒に飲まれる

◆真澄が見た酔っ払いの姿

酒は楽しいものですが、度が過ぎると、時には粗相をしてしまうこともあります。真澄の記録にもそうした「酒に飲まれて」しまった人々が描かれています。

天明五年（一七八五）四月、湯沢の山田家に滞在していた真澄は、主の山田氏と共に花見に出かけ、途中、主の知り合いの酒宴に同席することになります。最初は一同楽しげに飲んでいましたが、次第に深酔いした人々が座を乱し、真澄もすっかり興醒めしてしまったと記しています。

日記『小野のふるさと』本文より意訳

酒席にいる人たちの顔は、青葉さす夏山が紅葉したかのように、夕日に照り映えて赤く染まっている。高齢の老女が、腰を伸ばし、雪をかざした頭（白髪）を振り乱し、震える声でせきばらいをしながら、手を叩いて踊った。その姿を見た老女の縁者であろうか、胸が痛むかのように外に出て行った。また、扇を開いて片方の肩を出していた男がいたが、その男が酔って吐いた。もはや風情は失われた。

また日記『岩手の山』には、現在の青森県上北郡野辺地町周辺で、温泉帰りのたいそう酔った女性たちに出会ったことを書いています。酔っ払いの特性とでもいいましょうか、女性たちは、「若い時分は、急斜面も平地と同じように歩いたが、今は平地も急斜面のように感じる」、などと、即興の歌を歌って、笑いこけています。その様子は、道で擦れ違っただけの真澄の目には、少々はた迷惑に映ったのではないでしょうか。

5 酒を商う

◆酒の看板の話

前項「酒の名は」で取り上げた佐藤家のように、各地で酒を商う人々もいました。

寛政元年（一七八九）、真澄は北海道での酒の売買について記録しています。

日記『えみしのさえき』本文より意訳

戸外の障子に「七里酒」と書いているが、どんな酒を売っているのか、と店の主人に尋ねると、「この島には稲田がなく、米は他国から運ぶため、非常に乏しい。この島では濁り酒を造ることを固く禁じられている。そこで、濁り酒を売るときは「七里酒」と書く。「七里」と書いて「二里五里」＝「濁り」である意を、買う人に読み解かせる。あるいは酒の字に濁点を打ち、「濁り」の意を知らせる」と、笑って語った。

禁じられた濁り酒を求める市井の人々に応えるために考えられたのが、「謎解き看板」であった、とのことです。店の主人ではありませんが、思わず笑ってしまうような酒を巡る話ではないでしょうか。

濁り酒の看板
『えみしのさえき』館蔵写本

当館では、菅江真澄研究に大きな足跡を残した内田武志（1909～80）の資料を、「内田文庫」として収蔵しています。内田文庫は、平成8年（1996）の菅江真澄資料センター開設を機に武志の妹・内田ハチ（1913～98）から前年に寄贈された資料（第1期）と、その後、武志・ハチの関係者から断続的に寄贈された資料（第2期、第3期）からなります。

本展示で紹介する資料は、ハチが逝去するまでまとめていた資料（第3期）で、16個のケースファイル（整理後20ファイル）からなります。平成31年（2019）2月の寄贈で、「内田文庫」としては最後の受け入れとなる資料と考えています。

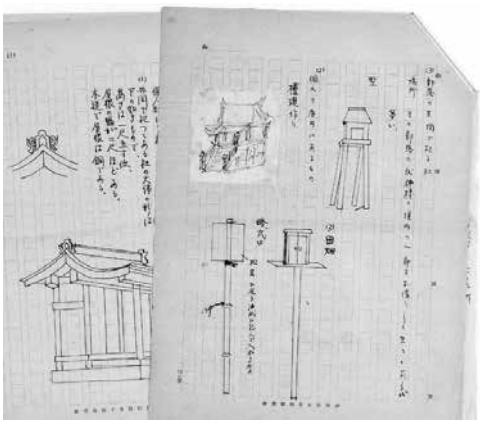
展示では、武志の研究生活（民俗学研究と菅江真澄研究）を5期に分けた上で、武志の年譜を概観しながら、当館にとって新収蔵となる資料を中心に紹介しました。

展示及び解説資料（12頁、館内印刷）では、第1期に寄贈された「内田武自身による年譜」（武は内田武志の本名）に基づいて作成し直した年譜（著作年譜を兼ねる）を掲示し、それに合わせて資料を紹介しました。本紙では、紙面の都合上、年譜を紹介することができません。平成31年（2019）3月発行の『真澄研究』第23号「内田武自身による年譜」を参考にしてください。当館ホームページでも御覧いただけます。

1. 静岡・東京時代―武志の民俗学研究―（昭和5年～昭和17年）

内田武志は鹿角で生まれて幼少期を送りましたが、兄の寛、それに武志の病気療養のために、一家は鎌倉市（神奈川県）、さらには静岡市に引っ越しました。武志は静岡で詩人の蒲原有明の知遇を得、彼から柳田国男を紹介されて民俗学に傾倒することになります。生まれ故郷の鹿角や静岡県下の民俗事象について、いくつもの民俗学雑誌に論考や報告を投稿し、方言集の本も上梓することができました。武志の調査方法については、初めのうちは実地調査も可能でしたが、血友病が次第に悪化したことからアンケート方式での調査に変わっていきます。その後、武志は、渋沢敬三が主宰するアチック・ミューゼアムに関わりを持ち、一家で東京に移って民俗学研究を続けることになりました。

蒲原有明自筆原稿
内田武志著『静岡県方言集』（昭和9年2月発行）の序文で、蒲原有明の自筆原稿。訪ねてきた内田武志に郷土研究（民俗学）を勧めたこと、この方言集が武志の実地調査に基づくことなどが書かれている。



静岡県立女子師範学校生徒による習俗調査の回答用紙
病気のために実地調査が困難になった内田武志は、その後、調査票等による習俗調査に切り替えた。本資料は、静岡県女子師範学校の生徒による回答用紙である。同校生徒が県全域の出身であるため、習俗調査には好都合であった。

2. 秋田での真澄研究（昭和20年～昭和29年）

昭和20年5月、内田武志の一家は空襲の激化から秋田に疎開しました。渋沢敬三や柳田国男からの影響で真澄研究を志していた武志は、その後、半年間疎開した鹿角で毛馬内町長・伊藤良三から秋田叢書と同別集の貸与を受け、真澄研究に勤しむことになりました。やがて秋田市に移り住むと、鹿角での研究成果を謄写版の『菅江真澄遊覧記総索引歳時編』として発行し、同時に「菅江真澄研究会」を立ち上げました。さらに、『秋田の山水』『菅江真澄の日記』『松前と菅江真澄』を発行します。その後、未刊であった真澄の著作を世に送り出すために、妹ハチらの献身的な協力を得て、『菅江真澄未刊文献集一』『同二』を相次いで刊行することになりました。

秋田文化史研究会発行「秋田文化」

昭和23年2月、内田武志は、奈良環之助をはじめとする郷土史家らと秋田文化史研究会を組織して「秋田文化」が発行された。第4号までは謄写版、翌年11月の第5号は活字版で発行。いずれも発行責任者は内田武志である。第5号以降の発行については不明であるため、活動が終わったものと考えられる。

3. 盲教育への関わり（昭和27年～昭和36年）

昭和27年7月半ば、盲学校中等部の須藤春代が内田武志を訪ねてきたことから、春代と武志・ハチとの交流が始まります。武志は、春代に心の内を詩に表現することを勧め、その詩は『春のだいち』（岩崎書店）として出版されました。当時の盲教育が世間の価値観の押しつけの上にあるのではないかとの疑問を持った武志とハチは、武志自らが病臥のままで生活しなくてはならない社会的弱者であることから、盲教育の改善を訴えていくことになります。『みちびき』（第16号まで）の発行を通じて、県内だけではなく、県外の盲教育関係者や文化人にもその輪を広げていくことになりました。その後、取り組んだ平凡社「人間の記録双書」の原稿執筆は、結局は未刊に終わりましたが、武志が自身を見つめるいい機会となりました。

ロマン・ロラン夫妻の写真（メッセージ付）
内田武志の勧めでロマン・ロラン著『ジャン・クリストフ』の点字訳に取り組んだ須藤春代は、夫人に手紙を書いた。夫人からは記念に、メッセージが書かれた夫妻の写真と居間に飾ってあったコップが贈られた。写真とコップは、春代の子息・豊口裕氏から当館に寄贈された。

4. 真澄研究再開と現代語訳の出版（昭和36年～昭和46年）

昭和36年8月には武志が師事した柳田国男が亡くなり、昭和38年10月には内田武志やハチの心の支えとなっていた渋沢敬三が亡くなりました。期を同じくするように、平凡社東洋文庫の一冊として、武志の編纂による「菅江真澄遊覧記」を出版する話が舞い込みます。同年12月の『出羽路』第21号に掲載された「菅江真澄と四つの地誌―その書誌学的研究―」を手始めに、武志は本格的に真澄研究を再開することになりました。昭和40年～昭和43年に出版された平凡社東洋文庫『菅江真澄遊覧記』全5巻は、現代語訳として画期的な出版となり、多くの人々に菅江真澄の著作に親しむ機会を与えました。

5. 全集の出版と武志の死（昭和43年～昭和55年）

現代語訳の発刊が終わった昭和43年、菅江真澄全集編纂の話が大藤時彦（成城大学）と宮本常一からほぼ同時期に提案されましたが、全集は宮本が推薦する未来社から刊行されることになりました。全集編纂の準備の中で、内田武志は自宅内に菅江真澄研究所を立ち上げ、「菅江真澄研究所報告」（4号まで）を発行します。武志が入門書と位置づけた『菅江真澄の旅と日記』（未来社）の刊行後、『菅江真澄全集』は昭和46年から刊行が始まりました。遺墨資料や未刊資料を調査しながらの刊行であったため、雑纂編の冊数がなかなか決まらないなどの困難はありましたが、武志が死去する昭和55年12月に本巻第11巻（12冊目）まで刊行され、死去の翌年、本巻第12巻（13冊目）が刊行されました。なお、形の上では「別巻二」の索引編が未刊のままとなっています。

展示資料一覧

プロローグ

「内田武自身による年譜」、『真澄研究』第23号

1. 静岡・東京時代―武志の民俗学研究―

蒲原有明宛石川啄木書簡（青写真、青写真を写した写真）、蒲原有明書簡3通、蒲原有明自筆原稿、『旅と伝説』の切り抜き5編（昭和8年内田武志論考掲載分）、『旅と伝説』5冊（内田武志論考掲載）、内田武志著『静岡県方言集』、内田武志著『鹿角方言集』、内田武志実地調査時の写真、習俗調査票「星・月に関する俗信・昔話の調査」、習俗調査の回答用紙「静岡県お犬様習俗・地の神様調査」（静岡県女子師範学校生徒による）、『静岡県方言誌　分布調査第一輯動植物篇』『同　分布調査第二輯童幼語篇』『同　分布調査第三輯民具篇』
【写真パネル】アチック同人写真、アチックマンスリー第6号（昭和10年12月30日）、アチックマンスリー第14号（昭和11年8月30日）、アチック・ミューゼアム『民具蒐集調査要目』口絵写真

2. 秋田での真澄研究

『菅江真澄遊覧記総索引歳時編』第1号、『同』第156号、菅江真澄研究会設立趣意書3種、昭和21年5月30日付柳田国男ハガキ、秋田文化史研究会「秋田文化」第1号～第5号、《かたね袋》の書写原稿、《かたね袋》に関する内田武志の自筆原稿、『菅江真澄未刊文献集一』『同二』、昭和22年墓前祭寄せ書き

3. 盲教育への関わり

『みちびき』第1号～第4・5合併号、須藤春代詩集『めぐみ』（謄写版）、『めぐみ』（活字版）、須藤春代詩文集『春のだいち』、ロマン・ロラン夫人から贈られた夫妻の写真（メッセージ付）とコップ、「人間の記録双書」の執筆プロット（構成表）、「人間の記録双書」原稿（未定稿）、『婉という女』（新潮文庫版29刷）、『婉という女』紹介の新聞記事（掲載紙不明）
【写真パネル】県立盲学校への『ジャン・クリストフ』点訳本の贈呈式など

4. 真澄研究の再開と現代語訳の出版

昭和39年7月9日付磯貝勇書簡、昭和41年2月3日付宮本常一書簡、昭和57年2月18日付東洋文庫担当編集者からの内田ハチ宛書簡、《雪のもろ滝》に関する内田武志の自筆原稿、長沢詠子製作の「枝下紀行」アルバム（昭和42年4月）

5. 全集の出版と武志の死

昭和43年7月13日付大藤時彦書簡、昭和43年11月17日付宮本常一書簡、武志による全集当初案（編集委員と全集構成）、全集に向けた自筆本の撮影風景（写真3葉）、全集の内容見本3種、全集の原稿底本となった『秋田叢書』

※宛先を明示していない書簡類は、内田武志に宛てられたものである。

企画展

重要文化財「菅江真澄遊覧記」の公開
～菅江真澄資料センター開設25年記念～

令和2年4月25日（土）～6月21日（日）

重要文化財「菅江真澄遊覧記」89冊（77冊12帖）は、文政5年（1822）12月、菅江真澄が秋田藩校明徳館に納めた著作を中心に構成されています。「菅江真澄遊覧記」は、江戸時代後期における郷土の歴史や文化、自然を知る手がかりとして、特に秋田では、長年、郷土史研究の中心に位置づけられてきました。まさに珠玉の文化遺産と言えます。今年度、菅江真澄資料センターの開設25年にあたり、当館寄託資料である重要文化財「菅江真澄遊覧記」の彩色図絵を紹介しました。

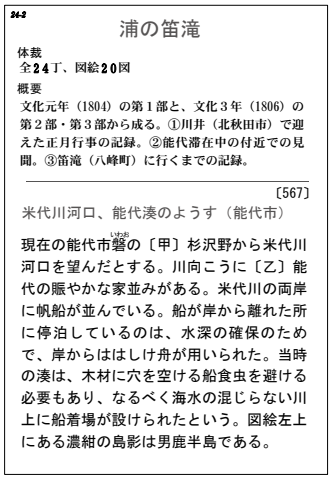
▼展示構成

序　章　菅江真澄とは
第1章　真澄の記録と重要文化財
第2章　旅の見聞を記録する（日記39冊）
第3章　名どころを描く（勝地臨毫12冊）
第4章　地域を調査する（地誌38冊）
第5章　25年目の菅江真澄資料センター

▼展示の特徴（当初計画と実際）

○主たる展示資料は重要文化財全冊
○図絵356図を4期に分けて詳細に解説
（↓5月12日火曜日、第2期からの開展となりました。）
（↓解説で指摘している箇所がわかりにくい場合、図絵の部分的な拡大や地名を明示した補助パネル（各期20箇所ほど）を設置しました。）
○「菅江真澄遊覧記」を18の視点から解説
（↓開展後、来館者の要望を受けて、「菅江真澄遊覧記を知る18の視点」についての解説資料（館内印刷、8頁）を配布しました。）
○図絵と現在の風景を対比したビデオを上映
○「菅江真澄遊覧記」全頁をパソコンで公開
（↓取り止めました。閲覧用パソコンは常設展にあるため、新型コロナウイルス収束後に利用できます。）
○展示内容を紹介する解説資料を配布
（↓カラー印刷の解説資料（12頁）を無料配布したほか、解説文の文字データ・開帖予定・カラー版解説資料をPDF形式でホームページに6月末日まで掲示しました。）
○重要文化財を多角的に知るための関連事業の開催
（↓講演会・博物館教室・ビデオ上映会・展示解説会の関連事業はすべて中止となりました。）
（↓来館できない方のために、展示内容を紹介する動画（4分間）を作成し、6月末日までホームページで配信しました。）

《浦の笛滝》第2期の展示



浦の笛滝

体裁
全24丁、図絵20図

概要
文化元年（1804）の第1部と、文化3年（1806）の第2部・第3部から成る。①川井（北秋田市）で迎えた正月行事の記録。②能代滞在中の付近での見聞。③笛滝（八峰町）に行くまでの記録。

〔567〕
米代川河口、能代湊のようす（能代市）

現在の能代市檜（ひのき）の〔甲〕杉沢野から米代川河口を望んだとする。川向こうに〔乙〕能代の賑やかな家並みがある。米代川の両岸に帆船が並んでいる。船が岸から離れた所に停泊しているのは、水深の確保のためで、岸からははしけ舟が用いられた。当時の湊は、木材に穴を空ける船食虫を避ける必要もあり、なるべく海水の混じらない川上に船着場が設けられたという。図絵左上にある濃紺の島影は男鹿半島である。

←書名

←著書の体裁と概要

←開帖図絵の要約（現在の地名）
←開帖図絵の解説

《浦の笛滝》での展示と解説は、
第1期　全集図絵〔559・558〕
第2期　同　〔567〕
第3期　同　〔569〕
第4期　同　〔574〕

編集後記（表紙解説も兼ねて）

・今年度は、新型コロナウイルスに振り回される一年となりました。と過去形で書いてみたのですが、この原稿をまとめている時点でもまだ収束の兆候さえ見えません。上記企画展はその影響を受けて期間が短縮されましたし、開展はしたものの関連事業をすべて中止にせざるを得ない状況でした。それでも、重要文化財「菅江真澄遊覧記」全点を並べて、図絵を丁寧に解説する新たな試みの展示となりました。毎週丁替えをして、たくさんの図絵を御覧いただきたいと夢想もしたのですが、それなりの分量の解説執筆と休館日ごとの展示替え作業が必要ですので、4期が現在の限界でした（実際は3期となりました）。表紙の写真4点は、企画展のようすです。さて、新型コロナウイルス感染防止のために、私たち学芸職員の日々の生活も大きく様変わりしました。展示室等に出る機会が極端に減ったため、その分、展示の準備や資料整理に多くの時間を費やすことができます。資料と向き合いながら、今まで見落としていた事柄が発見できたときは、ひとり悦に入り、誰かに伝えたい衝動に駆られます。それらはいずれ、展示や印刷物の文章等につながるはずです。（松山、2021.1.15）

真澄 MASUMI No.38
発　行　日◎令和3年（2021）3月19日
編集・発行◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足鳰崎字後山52
TEL.018-873-4121（代）